

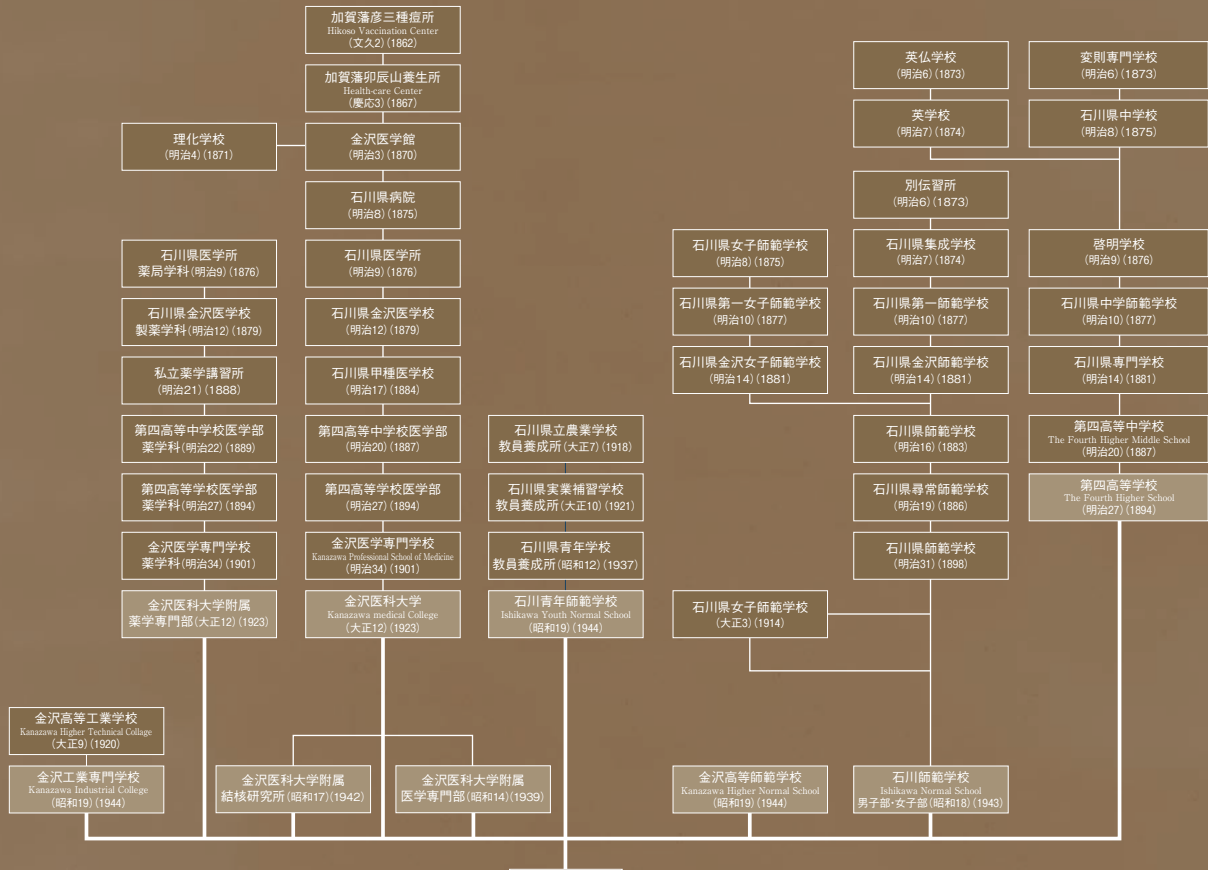
平成二十六年
度金沢大学資料館特別展

超然

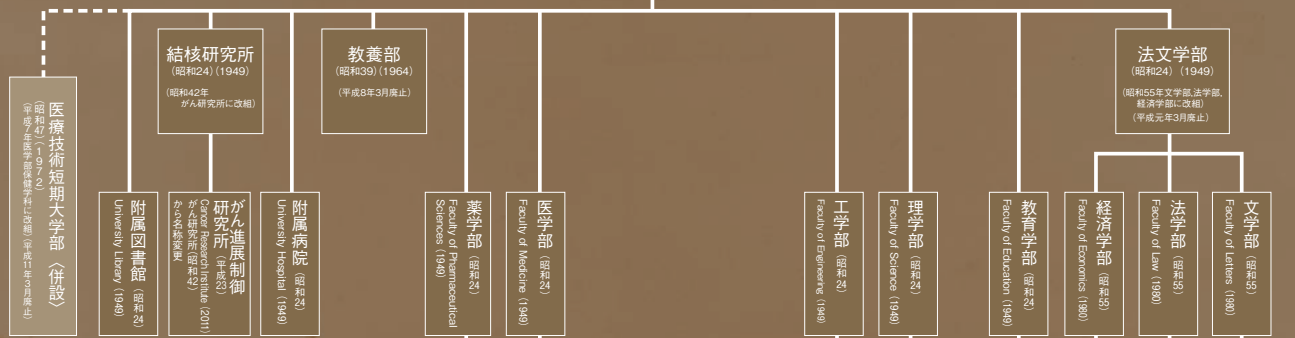
第四高等学校の校風と学生たち

金沢大学資料館





金沢大学
Kanazawa University
(昭和24年5月)
(May, 1949)



医薬保健学域 (平成20)
College of Medical, Pharmaceutical and Health Sciences (2008)

- 医学類 School of Medicine
- 創薬科学類 School of Pharmaceutical Sciences
- 薬学類 School of Pharmacy
- 保健学類 School of Health Sciences

理工学域 (平成20)
College of Science and Engineering (2008)

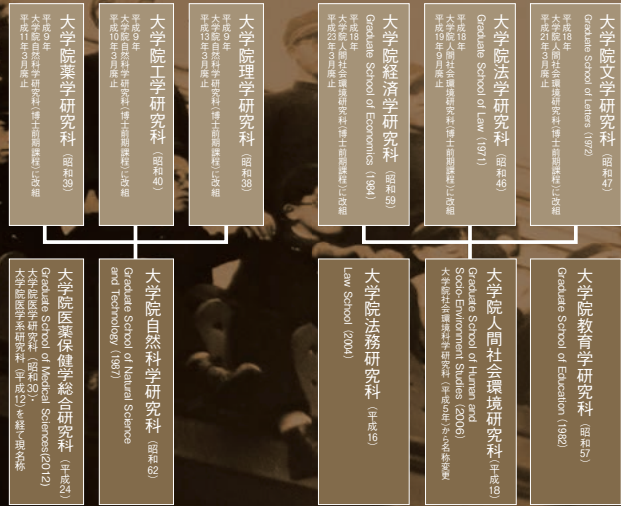
- 数物科学類 School of Mathematics and Physics
- 物質化学類 School of Chemistry
- 機械工学類 School of Mechanical Engineering
- 電子情報学類 School of Electrical and Computer Engineering
- 環境デザイン学類 School of Environmental Design
- 自然システム学類 School of Natural System

人間社会学域 (平成20)
College of Human and Social Sciences (2008)

- 人文学類 School of Humanities
- 社会学類 School of Sociology
- 経済学類 School of Economics
- 学校教育学類 School of Teacher Education
- 地域創造学類 School of Regional Development Studies
- 国際学類 School of International Studies

金沢大学の沿革 HISTORY of KU

- 1862 加賀藩彦三種痘所開設 (金沢大学の創基)
- 1949 金沢大学 発足
- 2004 国立大学法人 金沢大学発足
- 2012 金沢大学創基150年



※昭和24(1949)年以前の前身校沿革は主要なものを示した。
平成26(2014)年4月現在。

ごあいさつ

旧制第四高等学校、通称四高(しこう)は金沢大学の前身校の中でひとときわ際立っている。金沢市中心部の仙石町にあったそのキャンパスは、金沢大学に統合されたのちもしばらく使われ、多くの卒業生に親しまれたが、1964年に理学部が城内キャンパスに移転し石川県に移管され、1968年に中央公園となり、本館のみが残された。しかし、最近の、金沢の急激な発展の中で、四高の歴史が見直され、本館は2008年のリニューアルを契機に「石川四高記念文化交流館」となり、公園も本年6月に「いしかわ四高記念公園」と改称された。

金沢大学でも、近年、創立50周年記念事業(1999年)や創基150年記念事業(2012年)を通じて、本学の歴史の重要な位置を占める四高とのつながりが見直されつつある。また、多くの人々の努力によって残された資料館および附属図書館所蔵の多数の実験機器や標本・教育掛図等も、次第にその重要性が再確認され、いまや本学の「宝」となっている。

このような四高とのつながりに注目する動きは、四高の校風を表す「超然主義」にも及んでいる。今年度創設された、学内G Pに「超然プロジェクト」の名称が冠されている。高山樗牛(1871-1902)の「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」を引用したとされる「超然主義」は四高の伝統的な校風として語り継がれてきた[井上:2012 金沢大学資料館紀要]。しかしながら、この四高の「超然主義」とは何かについて、十分な説明ができる教職員・学生はまずいないと思われる。そこで、本資料館特別展では、「超然主義」の意義と四高の伝統を明らかにし、金沢大学が将来に向けて発展してゆくために、継承すべきものは何かということ問いかけたいと考える次第である。

最後に、本特別展の開催を迎えられたことは、昨年度より中心になって企画・立案・準備されてきた古畑徹前資料館長のご努力によるものであることを申し添えておく。

2014年10月

金沢大学資料館長 **奥野 正幸**

CONTENTS

P 1	ごあいさつ
P 2	1. 四高の伝統 四高略史/旧制高校の制度と校風/超然主義とは
P 5	四高キャンパス平面図
P 6	2. 「超然」の時代 明治30年代の日本
P 7	「城下町」から「軍都」へ～明治30年前後の金沢～…………… 本康 宏史
P 8	高山樗牛と「超然」…………… 杉山 欣也
P 9	3. 超然主義の誕生
	超然主義の誕生…………… 井上 好人
P 11	4. 超然主義と四高の学生生活 大正・昭和初期/戦時下から戦後へ
P 12	四高柔道部に見る肉体派の「超然主義」
	～井上靖(1907-86)在籍当時の練習日誌から～…………… 大久保英哲
P 13	四高手ぬぐいコレクション
P 14	四高同窓会の歴史と現在…………… 堀井 美里
P 15	四高年表
P 16	出品資料目録





四高の伝統

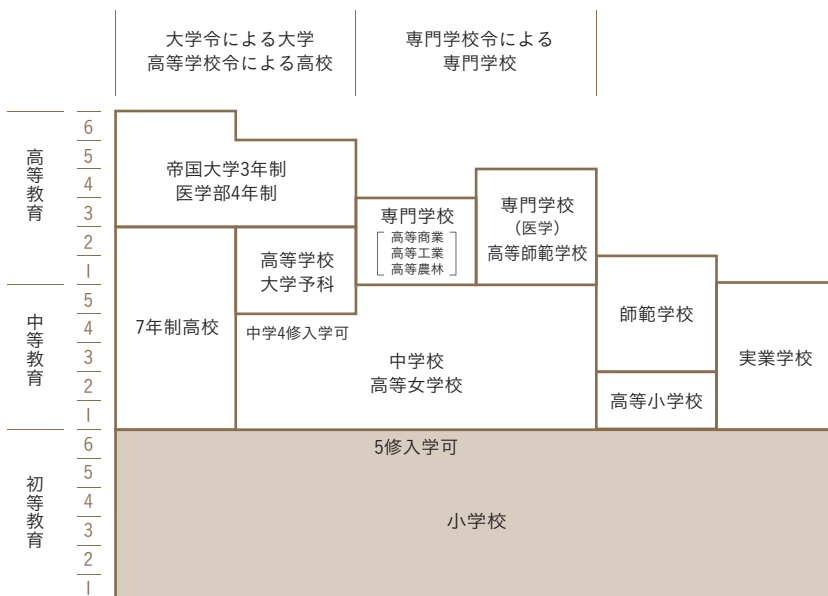
旧制第四高等学校(略称:四高)を含む7つの学校を基にして金沢大学が誕生したのは、1949(昭和24)年。それから65年の歳月が経った。いま改めて四高とのつながりが見直されているが、そもそも四高とはどんな学校だったのだろうか。まずはそこから見ていこう。

四高略史

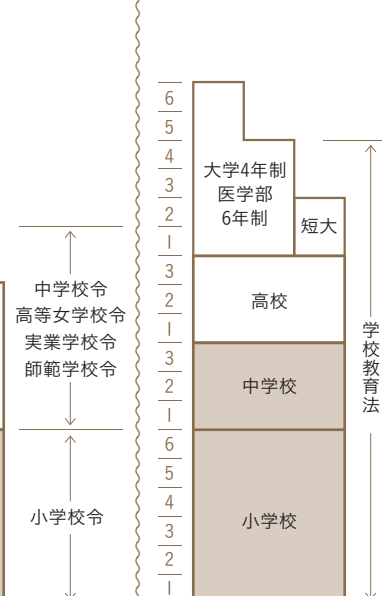
四高の歴史は、1887(明治20)年の第四高等中学校の金沢設置に始まる。前年公布の「中学校令」で全国に5つの高等中学校の設置が定められると、石川県は官民を挙げて熱心な誘致運動を行った。金沢設置はその成果である。校舎はそれまでの県の最高学府であった石川県専門学校を借り、教員の多くもここから移り、また生徒の97%までがここから入試に応じて合格した者であった。石川県専門学校と第四高等中学校の間には厳密な意味での制度的な系譜関係はないが、実質的な継承関係が存在する。ただ、初代校長には鹿児島県人で政治家でもあった柏田盛文が抜擢され、薩摩風が持ち込まれたため、石川県の人間との間に少なからざる確執があった。その影響を受けてか、この時期は中退者が多く、そのなかには西田幾多郎・鈴木大拙・徳田秋声・桐生悠々らがいる。

1894(明治27)年、「高等学校令」により第四高等学校と改称したが、内部葛藤は依然解消していなかった。これを大きく変えたのが第5代校長・北條時敬(在任:1898.1~1902.5)である。北條は金沢出身で、県専門学校・第四高等中学校の教官も勤めたことがあり、当時、西田を始め多くの生徒から慕われていた。彼によって改革が断行され、四高の特色とされる「三々塾」などの公認下宿(塾)制度も始められた。北條の転任後も生徒自身による校風確立運動が展開され、明治40年前後に四高の校風「超然主義」が誕生した。三高(のち八高)との対抗戦に向かう「南下軍」もこの時期に登場する。こうした流れを受けて、第7代校長・溝渕進馬(在任:1911.8~1921.11)の時代に四高は最盛期を迎え、精神と身体の鍛錬を重視する彼の教育は運動部の活躍を促した。1920年代に入ると、時流に媚びない「超然」の思想は膨張主義への批判という傾向をもつようになり、社会科学研究会を中心に社会主義的色彩を帯びた学生運動が盛んになる。1930年代になると、ファッション化の流れの中で学生運動は弾圧されていき、四高の軍事化も進んだが、自治の校風と相容れず、学校当局と学生との間で多くの対立事件が起こった。戦後は、「民主化」政策を背景とする新教育制度のもと、1949(昭和24)年5月、新制金沢大学に包摂された。学校は在校生がいる間は存続したが、翌1950年3月に全員卒業し、63年の歴史に幕を閉じた。

戦前(1935年頃)の学校制度



戦後の学校制度





旧制高校の制度と校風

旧制高校とは、1886(明治19)年の中学校令のもとの高等中学校を前身とし、1894(明治27)年の高等学校令によって設置され、1950(昭和25)年まで存続した、男子のみ的高等教育機関である。

最初に一高から五高までのナンバースクールと山口・鹿児島造士館の計7校が作られ、明治末までには六高・七高(鹿児島造士館を改称)・八高が開校、1918(大正7)年の高等学校令の改正以降、開設地の名前を冠した旧制高校(ネームスクールという)が多数作られ、最終的に旧制高校は、公立・私立・戦後特設校を含めて39校になった。

旧制高校は学校制度的には中等教育と大学との中間に位置し、高等普通教育の完成をその目的と謳いつつも、実質は帝国大学への予備教育機関として機能した。前身である高等中学校は、中央エリートを養成する帝国大学への予備教育(大学予科)を主目的に設置され、卒業によって帝国大学入学資格が与えられた。ただし、地域エリートともなる高度専門人の育成も意図され、医学・法学・工学などの専門科(学部)も設置されていた。四高を例に取れば、石川県甲種医学校を前身とする医学部がそれである。ところが、実業教育への要望が高まると文部省は専門学部の方を主とする改革を行った。それが旧制高校への改称である。しかし、この改革はうまくいかず、結局、1901(明治34)年に専門学部を分離して専門学校とし、以後、旧制高校は大学予科のみとなった。先述の四高医学部の場合は、分離独立して金沢医学専門学校となり、1923(大正12)年に金沢医科大学(医薬保健学域の前身)に昇格する。

旧制高校の教育は、専門教育を行う大学の前段階となる、外国語と一般教養を中心とするリベラル・アーツ教育であった。そこには将来エリートとなるのにふさわしい学問的な基礎と経験を積ませるとともに、生徒を社会化させ、人格を形成するという意図が含まれていた。そこで大きな役割を担ったのが、ほぼすべての旧制高校に存在した寄宿寮である。

寄宿寮は、1890(明治23)年に一高に自治寮が開設されたのが最初で、その意図は軽薄な社会との交流を断って、学校内で国家有為の人間を育てる点にあり、自治によって国家主義的・集団主義的価値観を自ら体得することが期待された。これを受けて一高の校風「籠城主義」が生まれたが、自治はその価値に反対する思索をも容認するため、1890年代後半になると、校風をめぐる論争がおこることになる。他の旧制高校でも、寄宿寮制度に教育効果があるとして1890年代に導入が進み、生徒自治が認められ、それぞれに校風が形成された。四高の場合は、時習寮ができたのが1893(明治26)年、自治が認められたのが1896(明治29)年である。各校とも国策でできたため、個々には教育理念・建学理念はなく、当初は皆一高に同じであった。一方、当時は統一入試で、第3志望までのなかで成績順に振り分けたため、各校には一高に入れなかった「不本意入学」生が多く、それが学校騒動の一因にもなっていた。そこで、各校ではその独自性を明瞭にし、生徒に学校へのアイデンティティを持たせるべく、その風土に合った学校改革が進められ、校風論争も寮を中心に盛んに行われた。こうして1900年代には初期の旧制高校各校で独自の校風が唱えられるようになり、それが伝統として廃止まで続くことになった。

ナンバースクールと校風一覧

略称	設立年月	所在地	校風フレーズ	後進校
一高	1886年4月	東京	籠城主義	東京大学
二高	1887年4月	仙台	尚志、雄大剛健	東北大学
三高	1886年4月	京都	自由	京都大学
四高	1887年4月	金沢	超然	金沢大学
五高	1887年4月	熊本	剛毅朴訥	熊本大学
六高	1900年3月	岡山	六高精神	岡山大学
七高	1901年4月	鹿児島		鹿児島大学
八高	1908年3月	名古屋	穩健・中正・堅実	名古屋大学

ネームスクールと設立年次一覧

山口高校	1886設立(1919再興)	大阪高校	1921設立
新潟高校	1919設立	浦和高校	1921設立
松本高校	1919設立	福岡高校	1921設立
松山高校	1919設立	静岡高校	1922設立
水戸高校	1920設立	高知高校	1923設立
山形高校	1920設立	姫路高校	1923設立
佐賀高校	1920設立	広島高校	1923設立
弘前高校	1920設立	旅順高校	1940設立
松江高校	1920設立	富山高校	1943設立



超然主義とは

四高の校風は「超然主義」と呼ばれる。その言葉自体は有名だが、いったい何を意味するのかは意外にわかりにくい。それを説明する四高OBたちの文章・インタビューを読んだり聞いたりしても、かなりの幅があって、すべてを説明できる概念が導き出しにくい。ただ、そこには理由がある。

「超然主義」は、1906(明治39)年に時習寮の炊事場・食堂・南寮が火事で焼け、150名居た寮生の大半が退寮するなか、38名の生徒が寮の再建と校風刷新のため、敢えて寮に立てこもり、「超然主義」を標榜して自己の進むべき道を求めることを宣言したのに始まるとされる。(その事実関係は井上好人氏の解説参照。)彼らは2年後の退寮に当たり、「超然趣意書」をしたためて寮に残したが、それがその後「超然主義」のバイブルとして寮に受け継がれていった。新入生は、時習寮に入寮すると、このバイブルが読み上げられ、それを理解することが求められた。けっして易しくないその文章に対する公式解釈はない。議論をしつつひたすら自ら会得するという、ある種「禅問答」のようなことが求められたのであるから、その理解するところに幅が出るのも当然であろう。

では、その「超然趣意書」に、「超然」の意味はどう書かれていたのであろうか。

然ラバ即チ所謂超然主義トハ何ゾヤ、超世脱俗ヲ其本領トシ、社会ニ全然没交渉ナルハコレソノ消極的方面ナリ。之ニ反シ混沌タル社会濁流ノ中ニアリテ而モ之ニ感染スルコトナク、尚進ンデ之ガ指導又任ニ当ルハコレ其積極的方面ナリ。我時習寮ノ取レル所ハ後者ニシテ之ヲ実現セントスルニハ、先ヅ協和親睦以テ高潔ナル共同的団だんらんノ真趣味ヲ解シいやく意智徳ノ碎励身体ノ健全ニ力メ、礼讓ヲ重ンジ威儀ヲ正シクシ廉恥ヲ励ミ志操ヲ固クシ、苟モ浮薄ノ行動傲慢ノ挙動アルナク能ク諸般ノ寮規ヲ厳守シ、師長ヲ尊敬シ学友ヲ親愛シ、堅忍不拔ノ精神ヲ發揮スルニアリ。(ふりがなは原文にはない)

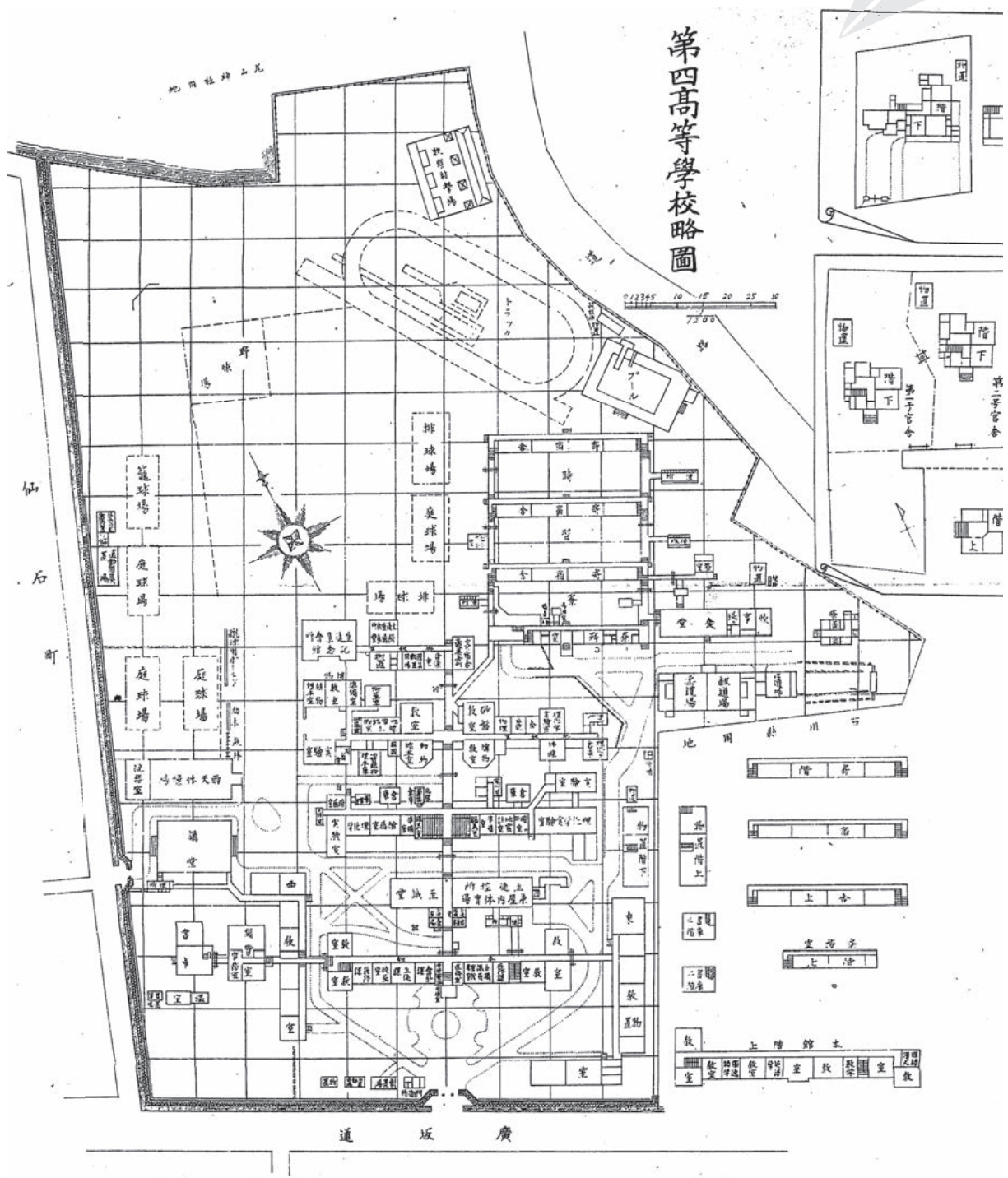
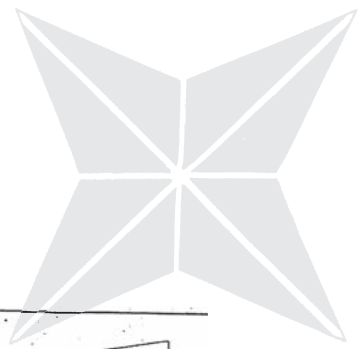
(『四高八十年』より引用)

当時、「超然」の語は一種の流行語であったが、意味としては世俗を墮落したものとみてこれと一線を画す反俗主義を根底に置きつつも、高みに立って社会の指導者となるべく努力するエリート主義の意味で使われる場合と隠遁主義的ニュアンスで使われる場合とがあった。「超然趣意書」は隠遁的なあり方を否定し、エリートの在り方を肯定することを明言し、その実現のための具体的な生徒としてのあり方を示している。しかし、一見具体的に見えるその主張も、社会の濁流に感染することなくその「指導」の任に当たると言いつつ、それがどの立場であるかを明言しておらず、生徒として守るべき規範は具体的だが、それを守った先にある世俗を超えたもの自体はかなり自由だったように読み取れる。ここが、学術・技芸・政治のどれであろうと将来は日本の指導者たることを明確に求めていた、一高の「籠城主義」と一線を画すところであろう。

一高の「籠城主義」は、1906年に校長となった新渡戸稲造によってその偏頗な国家主義・集団主義が批判され、「ソシアリティー」(社会的連帯)という新たな概念が示されて、校風論争が再びかまびすしくなるが、四高では「超然趣意書」以降、ほとんどその校風に疑念がさしはさまれることはなかった。それは、「超然」の語の持つ多義性と「超然趣意書」の持つ「禅問答」的性格によるのであろう。そして、だからこそ、大正・昭和初期のスポーツ活動や社会主義的活動、戦前の軍隊批判や学校批判、戦後の自助活動や学生運動などのすべてが「超然主義」の名のもとに行い得たのであろう。先述のように「超然主義」の理解は多様でその解釈を明示するのは難しい。それをあえて、今の私たちが継承する立場に立って最大公約数的な部分を解釈するならば、「世の風潮に流されることなく、確固たる信念と批判精神を持って、社会をよい方向に導く指導者になるべく自らを鍛え努力する学生生活のあり方」ということができようか。



四高キャンパス平面図 (1942(昭和17)年ごろ)



上が金沢城、下が広坂通り。その敷地は現在のいしかわ四高記念公園(旧中央公園)よりも一回り大きく、北は現在の金沢広坂合同庁舎を含んで尾山神社に隣接し、しいのき迎賓館北西角の緑地を含み、南は広坂通り中央を流れる用水まで及んでいた。開学当時は、上記図の庭球場辺りに建物があったが、1892(明治25)年に本館・至誠堂・物理化学実験棟・講義室の縦軸が建てられ、1893年に南寮・食堂・雨天体操場・柔道場等が増築され、以後、順次建物が増えていった。



「超然」の時代

四高の校風である「超然主義」が生まれたのには、当然、明治30年代前後の時代背景がある。このコーナーでは、「超然主義」を生んだ時代の雰囲気、日本全体の時代状況、金沢という都市の状況、「超然」という言葉のもとになった高山樗牛をめぐる社会状況、の3つの角度から探っていく。

明治30年代の日本

明治30年代(1897～1906)は、明治維新によって帝国主義時代の世界に乗り出して「一等国」をめざした日本が、憲法(1889)・議会(1890)という近代国家の体裁を整え、日清戦争(1894～95)の勝利で東アジアの覇者となって植民地を獲得し、帝国主義国家としての道を歩み始めた直後の10年間である。ただ、帝国主義国家の仲間入りをしたとはいえ、明治30年代当初の日本にはまだ「一等国」たるにふさわしい条件が十分にはそろってはいなかった。一つは世界列強からの承認、もう一つは「国民」の創造とそれを支える「国民文化」の構築である。

前者は、日露戦争(1904～05)によってもたらされ、その勝利と戦争前後における帝国主義列強各国との新たな同盟・協商関係成立のなかで達成された。日清・日露の勝利は日本の工業化の進展を促進し、鉄道を中心とする近代的な交通網が整備されて全国の一体化が進んだが、一方で多数の労働者を生み、労働争議などが多発するようになっていった。増税政策や講和条件への不満などで日露戦争後には全国で騒擾事件も発生したし、また、勝者としてのおごりからか、軽佻浮薄の社会風潮も蔓延していて、どことなく騒然とした雰囲気があった時代でもあった。

後者は、まず、明治初期から進められていた学校教育の普及の上に立ち、「国語」の形成という形で進められ、この時期、国語科の制定と学校教育におけるかな字体の統一(1900)、標準語選定を行う国語調査委員会の設置(1902)、国定教科書の導入(1903)と進展した。特に国定教科書は、標準語と忠君愛国思想の普及に大きな役割を果たした。「国民文化」の構築という点では、明治初期の廃仏毀釈に代表される伝統文化の否定から、天皇の京都行幸(1877)を契機として天皇を中心とする伝統文化の「創造」へと政府の文化政策の舵が切られ、天皇陵の「確定」や天皇家と関わる施設の顕彰が進み、古代文化や古代史などへの関心も掻き立てられた。日本独自の歴史が西洋の時代区分の方法論をもって成立し、飛鳥文化・天平文化・国風文化などの日本文化のイメージが確立するのもこの時期である。文明国たる条件の一つと見なされた学問・文学の興隆も、この時期には帝国大学を中心に諸学問が西洋を基準に制度化され、明治20年代に始まった近代文学も確固たる地位を確立し、「国民文学」なる言葉も生まれた。地域でもそれぞれのアイデンティティ確立への動きが盛んとなり、郷土の歴史が見直され、郷土愛が強調され、それが戦争を通して愛国心につながるようにもなった。このほかさまざまな文化装置によって、天皇を中心とするナショナルアイデンティティの確立が図られ、「日本国民」が創り出されていった。

こうして「一等国」たる条件を満たし、日本が帝国主義列強の仲間入りをしたのが明治30年代である。



高山樗牛(『高山樗牛全集』より)



日露戦争の沙河会戦(1905)の立体写真



『少年世界』創刊号(1895)の表紙

「城下町」から「軍都」へ ～ 明治30年前後の金沢 ～

本康 宏史 (金沢星稜大学教授)

「城下町」の衰退

金沢市の近代史にとって、明治30年前後は大きなターニングポイントであった。「加賀百万石」の城下町、三都に次ぐ繁栄を誇った金沢は、明治維新以降急速に衰退した。廃藩置県にともなう諸改革により旧藩士族は没落し、消費経済を武士階級に依存していたこの都市に致命的な打撃を与えた。これに拍車をかけたのが明治14年(1881)の松方デフレで、士族はもちろん多くの商家も没落、金沢町(城下)の人口は、明治5年に12万3千余人だったものが、13年には10万8千余人、22年には9万4千余人、30年には8万1千余人と激減した。ところが、人口動態を含め、明治30年前後を画期に、金沢市勢は劇的な回復を遂げるのである。その背景には北陸線の敷設と第九師団の設置という、二つの「大型プロジェクト」があった。

北陸線の開通

金沢駅の開業は明治31年4月1日のことである。当日は、新聞記事が「煙花・緑門(アーチ)及び無数の球灯等ありて喝采涌くが如し」と伝えるようなお祭り騒ぎとなった。新築された駅舎の前では、相撲、餅まきが行なわれ、北陸線の開通・開業を記念する祝宴は、旧藩老の奥村男爵を委員長に、旧藩主前田家ほか「お歴々」が参集し盛大に開催された。一番列車が出発する時刻には、「見送り人・傍観人は停車場近傍に山を為し」、津幡や鶴来あたりから犀川の鉄橋のあたりまで見物人で埋まったという。まさに、昨今の「北陸新幹線騒ぎ」を彷彿とさせよう。当時、一日の乗降客は平均2160人に過ぎなかったというが、それでも鉄道の開通は、遅れていた北陸の文明開化が一気に進んだ気分を市民に与えた。人々は沈滞した金沢の街に光明が指したように感じ、長期的な人口減少に歯止めをかけるものと期待されたのである。

ちなみに、開通時の金沢市は奥村市政のスタートとも重なっていた(明治31年1月～35年4月)。三代目金沢市長の奥村栄滋は旧加賀藩の八家出身、代々一万一千石を領した上級武士である。さきの開業記念祝宴の委員長を奥村が務めたのもそういう事情であった。奥村在任中の金沢は、北陸線の小松-金沢間の開通、金沢電気株式会社の送電開始、市内電話の開通など、目に見える近代化事業が続いた。なかでも日本海側ルートに鉄道が通じたことで、交通・運輸の全国ネットワークに組み込まれることになり、衰退の一途であった市勢に歯止めをかける役割を果たした。明治31年、鉄道開通時に8万人台だった金沢の人口は、日露戦争の終わった39年には、10万人を突破している。さらに、鉄道の開通とともに、金沢市民のなかにも北陸の中核都市としての自覚、それにふさわしい都市としての景観を求める動きが生じるようになる。道路の整備、公園の設置などは、その当時、眼目として挙がっていたものである。

第九師団の創設

金沢駅開業と同じ年、31年の11月には、旧金沢城内に陸軍第九師団の司令部が設置された。「軍都」金沢の誕生である。その際、城下町時代の広大な城地や武士地などが軍用地として変容を遂げた点に、近代都市としての金沢の特徴がある。まず、金沢城跡には、師団司令部や旅団・連隊の司令部が置かれた。下石引、出羽町一帯の本多家上屋敷や篠原出羽守屋敷などの大身武家屋敷地は、出羽町練兵場、九師団兵器庫、師団長官舎に(現在の県立歴史博物館、県立美術館、石川護国神社など)、奥村宗家の上屋敷は旧陸軍衛戍病院(現、金沢医療センター)に取って代わられた。小立野台地の旧武士地は、射撃用練兵場(金沢大学工学部跡)に転用されている。また、旧城下寺町の市街地周辺にも野村練兵場や歩兵連隊・各特科隊が設けられたことで、「軍都」の郊外化が進展するという要素も重要であった。

一方、師団誘致に対する金沢市の意気込みには並々ならぬものがあった。例えば、明治29年には、練兵場用地30万坪に対する不足資金の募金も率先して実施している。「国家の長計たるのみならず、我が地方の利益を増進するものなり」と訴える『野村兵営用地募金趣意書』の文面からも、その意欲は十分にうかがえよう。このあたりの事情は、分野こそ違え、明治10年代の四高誘致における県・市、ならびに金沢市民の意識に通じるものがある。いずれにせよ、こうして金沢は、北陸最大の「軍都」として発展の緒に就いたのである。

日清戦後経営と地域社会

こうした都市の性格は、地域の経済や社会に大きな影響を与えた。そもそも奥村市長の在任期は、中央ではいわゆる日清戦後経営と政党活動の本格的な展開期にあたる。自由・進歩両党の系譜を引く各政党の離合集散にともない、県下政界においても政争に明け暮れる日々であった。ちなみに、明治33年11月には、立憲政友会石川支部が結成されている。また、日清戦争後の明治30年代前半は、師団増設に代表される軍備拡充が国策となっており、他方、国庫収入の増加を増税にもとめる政策を嫌う空気も強かった。政府による議会への法案提出に先立って、31年10月、金沢市会でも反対決議や意見書提出を行い、市議・参事会代表の上京まで試みている。同意見書には、増税は市民生活の困窮をもたらし、市の発展に打撃を与えるものと糾弾するものであった。

すなわち、明治30年前後の金沢は、ようやく明治初年の人口に復し、北陸の中核都市として伸びる目途がつきはじめた時期であったとともに、社会問題が政治と地域社会の課題として人々の意識にのぼってきた時期でもあった。こうした時代背景が四高生の「超然」志向にどのような影響を与えていたのか、今回の展示を契機に、改めて考えていただければ幸いである。

高山樗牛と「超然」

杉山 欣也（金沢大学教授）

四高の校風を象徴すると言われる「超然」。このことばは、1906(明治39)年3月の時習寮火災ののち寮にとどまった学生たちを中心に唱えられ、翌々年7月に彼らが卒業する際に執筆された「超然趣意書」において明瞭になったとされる。『老子』にみえることからわかるように「超然」はとても古いことばだが、四高における「超然」が明治期の代表的評論家・思想家である高山樗牛に由来するのは次の引用に見るとおりだ。

「超然」それは成程、時代精神を説き、日本主義を説き、やがては天才主義を説くに至った高山樗牛の「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」の句に暗示を得て居り、又その句自身も然るべき意義を有する味はうべき言ひはあるが、そして又残留生の中に樗牛と故郷を同じくする者があつた事も考へねばならぬが、然も寮に於ては超然主義が標榜されるに至つたのは注目さるべき特殊の意義をもつのであり、既に生れた「超然」は全く新しい言葉として存在したと云ひうるのである。
(『第四高等学校時習寮史』、昭和23年4月、第四高等学校時習寮寮史編集委員会編)

高山樗牛は1871(明治4)年、現在の山形県田川郡鶴岡生まれ。本名は林次郎。本姓は斎藤氏だが、実父の兄の養子となり、高山姓を名乗った。福島中学より東京英語学校に転じ、仙台の二高予科に進んだ。中学時代より文才を示し、二高では『文学界雑誌』を創刊して評論等を発表するかわら、『山形日報』にゲーテ「若きウェルテルの悩み」の翻訳を載せるなど、早熟の才を発揮した。1893(明治26)年9月、二高を卒業。東京帝国大学哲学科に入学した。1894(明治27)年、小説「滝口入道」が『読売新聞』の懸賞小説に入選、連載された。また、1895(明治28)年1月に東大文科大学の機関誌として『帝国文学』が創刊されると、その編集委員の一人となる一方、同年1月に発行された日本初の総合雑誌『太陽』で時評を担当し、文学欄の主筆の座に就くなど、論壇の若きスターとなった。のちに橋川文三が「樗牛の文章が文字どおり一世の青年を魅惑し、庶民的な一般性さえもったことがあった。」(「高山樗牛」)と述べたように、彼の文章はとくに青年層の人気を集め、彼の文章のあるとないとで『太陽』の売り上げが一万部は違うといわれた。代表的評論「美的生活を論ず」(1901(明治34)年8月『太陽』)は、美の本質を本能の肯定にあると主張し、坪内逍遙や島村抱月との間に激しい論争を引き起こしたが、個性に目覚めはじめた当時の青年層に大きな影響を与えた。東京大学講師の職にあったが、肺病を患っており、1902(明治35)年に没した。墓所は静岡県静岡市清水区にある龍華寺にある。

上記した『第四高等学校時習寮史』にある「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」の一節は、樗牛の墓碑銘として名高い。没後出版された『樗牛全集』(1904(明治37)～1906(同39)、博文館)の表紙にも刻されており、彼の文業および生涯を象徴する一節とすることができる。「吾人」とは一人称の代名詞で「私」あるいは「私たち」と同じ意味であり、私(たち)は「現代を超越」して次の時代を切り拓かなければならない、というのが一節の趣旨となろう。前述した「超然趣意書」には「超然主義トハ何ゾヤ、超世脱俗ヲ基本領トシ、社会ヲ全然没交渉ナルハコレソノ消極的方面ナリ。之ニ反シ混沌タル社会濁流ノ中ニアリテ而モ之ニ感染スルコトナク、尚進デ之ガ指導又任ニ当ルハコレ其積極的方面ナリ。我時習寮ノ取レル所ハ後者ニシテ」云々とあり、この一節の趣旨を汲んで「超然主義」が構想されたとしても不都合はない。また、先述したように、樗牛は当時の青年層の知的ファッションともいえる存在だった。その文業を収めた『樗牛全集』の表紙に刻された一節が当時の四高学生に深い印象を与えたとしても不思議ではない。

ところで、樗牛の一節にあるのは「超越」であり、「超然」ではない。「超越主義」ではなく「超然主義」が採られた理由として、「超然」が当時の流行語に近いことばであったことを説明する必要がありそうだ。

「超然」の語が四高で唱えられはじめた1906年は、日露戦争が終結した翌年である。日露戦後の日本社会は、明治維新前後よりはじまる近代化が一段落し、知的青年層の間に「立身出世」に代表される功利的な人生観に対する深い懐疑が芽生えていた。「煩悶」ということばはその代表格で、夏目漱石や森鷗外、あるいはのちに『白樺』に依ってデビューする志賀直哉・武者小路実篤などがこの時代の青年層の苦悩を描いた。たとえば、夏目漱石「門」(1910(明治43)年)の主人公・宗助は知人から「超然派の一人」と評されているが、宗助は若き日の経験から世間との交わりを絶ち、孤独な生活を送る人物である。このように、世俗と一線を画することで個人の内面を尊重しようとする態度として「超然」ということばが用いられていることは、永井荷風「新帰朝者日記」(1909(明治42)年)などにもみることができる。この例は「超然趣意書」のいう「超然主義」の「消極的方面」であるが、そのような風潮に対する学生自身による打開への模索が、「超然趣意書」の定義する「超然主義」の「積極的方面」といえる。このような個性尊重主義の「積極的方面」は、樗牛の説くところでもあった。樗牛の墓碑銘にある「現代」の「超越」、そしてそこから導き出された「超然」は、四高生にかざらず、当時の青年層の直面した精神的課題を象徴することばであったといえるだろう。



超然主義の誕生



四高の伝統「超然主義」は、いわゆる超然火事(1906年3月)を契機に誕生したとされるが、その前提として、第5代校長北條時敬(在任:1998.1~1902.5)以来の校風改革の土台と、それを引き継いだ教員や在校生たちによる校風改革運動があった。このコーナーでは「超然主義」誕生の経緯・事情を明らかにする。解説は、この問題を研究している金沢星稜大学の井上好人教授にお願いした。



超然主義の誕生

井上 好人 (金沢星稜大学教授)

四高の校風を象徴する「超然主義」。高山樗牛の「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」を引用したとされるこの宣言は、時習寮をめぐる印象的なエピソードと共に語り継がれ、一高の「籠城主義」に対する四高の伝統的な校風として広く喧伝されてきた。この伝統は、河合良成が在学中(1904(明治37)年~1907(同40)年)の校風改革運動とその後輩・尾佐竹堅の主導した「寒潮事件」*(1908(同41)年)を経る過程において“創られた”ものである。

E.ホブズボウム(1992)は、様々な社会集団にまつわる文化的な伝統の多くが、ある時期に“創られた”ものであることを指摘している。彼は「伝統」を、社会変化を経験した集団によるアイデンティティ表明のための、あるいは社会的な結びつきを確保するための作為的な政治過程として捉えたのである。では、「超然主義」はどのように“創られた”のだろうか。

「超然主義」が宣言されるきっかけとなった出来事は、1906(明治39)年の時習寮火災である。3月19日の深夜、時習寮は、炊事場付近より出火、炎はまたたく間に食堂から南寮に燃え移った。当時の時習寮は北、中、南の3棟体制、寮生150名を抱えていたが、火災後の生活環境が十分に保証できず全寮生に退寮許可が出された。だが38名が寮に残った。このとき――

安易な下宿生活の許されるにも拘らず、敢て不自由を忍び、又蔭口に耐へ、危機に瀕した時習寮を死守せんとする人達であった。(『時習寮史』24頁)。

彼ら時習寮生有志は、“超然主義”を標榜して、世俗を離れて、寮に立てこもり、自己の進むべき道を求めることに専念することを宣言した。(『四高八十年』43頁)

このエピソードを読めば、学生としての生き方への覚醒はかくもドラマティックになされるものか、と感動を覚えるだろう。だが、少し冷静になってみれば次のような疑問が湧き上がってくる。「38名」の「たてこもり」の期間、彼らはどのようなメッセージを発していたのだろうか。いや、そもそも彼らの寮に残るという選択は、「死守」や「立てこもり」という言葉が含意しているような意志的な行動だったのだろうか、と。

実は、「38名」が火災後自炊生活した期間は4ヶ月間であり、この期間に寮生からメッセージが発せられたという記録はない。それどころか、ちょうど当時、校風論のイデオログであった河合良成は「沈滞の時習寮也、萎微の時習寮也」と批判を繰り返してきていた。寮は校風振興の拠点となるべきなのに、往年の「健児意気將に天を呑まん」としていた頃と比べ、現状は「悉んど存在せず」の状態であるというのである。

寮の「沈滞」については、火災前から懸念していた人物がいた。西田幾多郎である。火災のあと、彼は友人たちに送った書簡の中で時習寮に言及している。「昨夜我校の宿舍一棟焼失す。精神先つ亡びて形骸も之に伴ふものか」(山本良吉宛)と。西田は、当時の四高を、教師も生徒も「独善主義に傾き無気力極まる」(堀維孝宛)と観察していた。河合と西田の眼差しは奇しくも一致していたのである。



では、寮に残った「38名」はどうしていたのか。寮内に残った当事者のひとり小林鉄太郎の証言がある。

火災後間もない三部医科の独逸語試験に和訳問題として、「三十六(ママ)人の感心な生徒達は彼等の焼け残った学校に踏みとゞまり校風刷新のため不自由を忍びつゝ自炊生活を開始した。云々」の文が提出された。「何だ之は俺達のことを言つてゐるのだ、私達の寮に残留してゐることが校風刷新上に関係があるのだ、かう気がついたのは少くとも私自身にとつてはこのドイツ語の試験問題からでした。(『時習寮史』)

この証言によれば、彼らが自ら寮内に残った行動を校風振興上何らかの意味あるものとして自覚的に捉えるようになったのは、ドイツ語教師・三竹欣五郎の示唆によるものだったことになる。三竹は、西田の盟友でもあり学生指導に熱心だった。当時、生徒監を務めていた彼が学生たちの行動を“意味あるもの”として気づかせこれを賞賛し鼓舞したのである。

校風改革運動とは、学校を人格形成のための重要な場だと考えるようになった学生たちが、理想の学校生活の在り方を模索していく奮闘の過程であった。そこでは、自身のアイデンティティ確立のために学校生活をいかに築いていくべきか、仲間たちとの関係をどう取り結んでいくべきか、ということが学生のみならず教師たちも巻き込んだ関心事になった。共同生活を営む寮が、象徴的な場として論争の槍玉にあげられる所以である。

「超然趣意書」の提出と「超然主義」の標榜は、学生や教師たちのこうした奮闘の結実であった。「超然趣意書」は、1908(明治41)年の秋(同世代の卒業時)に、寮代表者から校長・吉村寅太郎に提出された。河合良成や西田幾多郎の寮への問いかけは、ちょうど火災から2年半たってようやくその答えが出されたのである。時習寮が「超然寮」のニックネームを冠し、「超然主義」とは何か、が語られるようになるのは、これ以後の話である。「38名」が「校風発揚論の先駆」として英雄視され、寮風会も結成され「超然主義ヲ標榜シ、純良ナル寮風ヲ発揚シ、是ヲシテ校風タラシムル」と謳われるのも、1909(明治42)年になってからである。神話はこの頃に“創られた”のである。

ところで、「超然」という用語は、高山樗牛からの引用として示されるが、「個人超然於塵世之外」の言からも度々引用される当時の流行語であり、一高の「籠城主義」や三高の「屹然として俗界に超越し」の精神とも通底している。世俗を墮落したものとみなし「徳義」を維持するためにこれと一線を画したいとする反俗主義を内包している。夏目漱石の小説『門』に、社交を嫌い孤独な生活を旨とする主人公・宗助が「超然派の一人」と擲揄される場面が出てくる。『門』の連載された時代(連載は1910(明治43)年、朝日新聞)において「超然」はすっかり人口に膾炙するフレーズになっていたことがわかる。実は河合自身も、時習寮を表現するのに「超然塵外に聳立して俗流を白眼に附し」と用いているのである。

このように考えると、「超然主義」とは、「38名」だけでなく、河合良成らの校風論者、そして西田や三竹のような教師たちも含めたすべての四高関係者たちによって議論され、試行錯誤され、そして生み出された賜物であるということもできるだろう。

四高の伝統は、今日までの四高生全員の学生生活の足跡として常に問い直され、現在においても新たに“創られ”続けているのである。

参考文献

ホブズボウム、1992、『創られた伝統』、前川啓治・梶原景昭訳、紀伊國屋書店。

井上好人2012、「四高・「超然主義」の神話誕生：河合良成の校風改革運動と時習寮の「38名」」『金沢大学資料館紀要』第7号。

*寒潮事件：『寒潮』は菊地幽芳が大坂毎日新聞に連載した新聞小説(連載期間：1908(明治41)年1月1日～4月21日)。主人公の一四高生と女学生の恋愛を中心に男女3組の恋愛模様を描いた物語。この物語は実話に基づくこととされ、その描かれ方に憤慨した四高の教員・生徒たちの抗議で連載は打ち切られた。これにより四高の団結はより強固なものとなった。

IV

超然主義と四高の学生生活



「超然主義」が確立したあとの大正・昭和前期の四高生たちは、新入生として寮に入ると「超然趣意書」の奉読が行われ、その意味するところを「身体化」することが求められた。彼らはそれぞれの解釈に従って「超然主義」を掲げて学生生活を送り、帝国大学・官立大学へと進学していった。このコーナーでは、「超然」の名のもとに行われた四高生たちの学生生活を、さまざまな角度から照射してみたい。

大正・昭和初期

旧制高校生の服装・生活スタイルは一般的にバンカラと呼ばれ、その点は四高生も同じであった。典型的な服装は弊衣破帽——よれよれの学生服(弊衣)にぼろぼろの学帽(破帽)、マントに高下駄、長髪に腰に手ぬぐい——というスタイルであった。学帽は正面に校章(四稜の北極星)がつき、白線2本が巻かれていたが、1918(大正7)年までは四高を示すべく白線は4本だったという。たき火を囲んで寮歌を謳歌するファイヤーストーム、街に繰り出して氣勢を上げる街頭ストームなどの「ばか騒ぎ」も特徴的な生活スタイルだったが、これには学生間の連帯意識を作り出す役割があった。このような世俗とは異なる服装・生活スタイルが明治末期に確立し、「エリート」意識の表象としての意味も持ちつつ、伝統として大正・昭和へと引き継がれた。

大正期の四高を象徴するのは、運動部の活躍である。運動部は北辰会という学友会に属し、柔道・剣道・弓道・漕艇(ボート)・野球・庭球(テニス)・排球(バレーボール)、水泳・陸上競技・旅行(登山)など多数あった。特に柔道部は全国高専柔道大会を第1回(1914)から7連覇し、四高の全盛期といわれた溝淵進馬校長時代(在任:1911.8~1921.11)の象徴的存在であった。運動部の活動は「身体ノ健全ニ力(つと)メ礼讓ヲ重ンジ」と述べる「超然趣意書」の具体化と理解され、自己の世俗的な利害や合理主義を超えて、時に己の身体さえも超えようとする自己超克のスポーツと評された。また、彼らの遠征たる「南下軍」は、学校のアイデンティティを象徴する重要な行事であった。北辰会に属した文化部の活動も活発で、学友会誌『北辰会雑誌』(148号から『北辰』)は雑誌部(のち文芸部)が編集し、それに携わった者のなかにはのちに学界・文学界で活躍する人物も少なくなかった。

大正末期から昭和初期には、学内で社会主義思想が流行したが、これも「超然主義」が根底にあったからといわれる。当時の時流を膨張主義と見なした、それを超えて世の中に関わることを模索する生徒たちにとって、社会主義思想は非常に魅力的だったのである。1923(大正12)年には社会思想研究会ができ、2年後には四高社会科学研究会(社研)が誕生。世界恐慌を背景に、1928(昭和3)年には会員が165名、読書会員が100名にも達し、実に四高生の3分の1を組織するまでになった。しかし、文部省の指示のもとに学校側の締め付けがきつくなり、また社会主義運動自体が弾圧されるようになってくると、活動を継続できなくなり、1930年頃には四高社研は組織を解体した。

戦時下から戦後へ

1925(大正14)年の陸軍現役将校学校配属令以降、旧制高校の軍事化が始まるが、当初、四高生にはこれに抗する雰囲気があった。戦時色の強まる日中戦争開始後も、時局・体制に批判的な視線を持ち続ける者はいた。例えば1940(昭和15)年夏に興亜青年勤労報国隊に参加して上海・南京を視察した一文科学生は、その報告文に、支配者然とふるまう日本兵や彼らに怯える中国人の姿をあえて記している。同年、学友会は報国団に改編され、学校の軍国主義化がいつそう進むが、漕艇班の琵琶湖遭難事件が起こると、生徒大会で学校への不満・批判が噴出した。1944年に学校側が寮自治に介入し、「自治」の額を撤去した際にも、校長排斥を謀議した粟ヶ崎血盟事件が起きている。

戦争が終わると、四高生たちはすぐにかつての四高の姿を取り戻そうとする。敗戦から2か月しかたない1945年10月には3年ぶりに寮記念祭が復活し、委員長により「超然趣意書」の朗読と自治寮再建に向けての宣言が行われた。そして12月には寮自治復活が実現する。「超然」は、戦後の四高再出発の旗印ともなったのである。

四高柔道部に見る肉体派の「超然主義」

～ 井上靖(1907-86)在籍当時の練習日誌から ～

大久保 英哲(金沢大学教授)

「超然主義」は、校風として四高の中を吹き抜け、学生、卒業生、教師間に受け継がれ、思想、哲学、文学などさまざまな文化・文学方面に独特の風紋を作りだした。では生徒たちの身体にはどのような景観を生み出したのか。それを四高肉体派の牙城ともいべき柔道部に見てみよう。

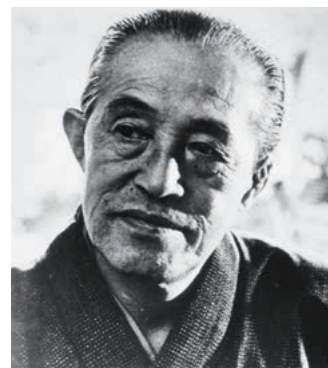
作家井上靖(1907-86)は1927(昭和2)年、20歳の時に四高に入り、柔道に明け暮れて主将まで務めた。小説『北の海』(新潮社)に描かれているように、井上は体格や天分が物をいう立ち技よりも「練習量がすべてを決定する柔道」として寝技を重視し、徹底して練習に明け暮れるストイックな生活を送った。「道場という一つの修道院に入ったようなものであった」(「青春を賭ける一つの情熱」)と語る。むろん学業はさして念頭にない。

当時の「部律」をみる。部員は午前8時頃起床、午後10時以後は絶対安静、11時消灯と日常生活が規制され、自分より弱い者への挑戦を戒め、相手を敵討ちとみなして「参った」を安易に言わせない厳しい掟であった。通常の練習は2、3時間であるが、中心は寝技主体である。その中でも最も過酷なのが「飛行機」である。一人が次々と相手を替え、へばるまで試合をする。一人で20人前後を相手に2時間を超えて取り組むこともあった。1927(昭和2)年11月23日には二木選手が13人に対して9勝2敗2分(決まり技は締め5、送襟締め1、三角締め1、押さえ込み2、崩上四方固め1など)の後、14人目の鶴選手に開始後4分で締められ、失神したことが記されている。つまり飛行機とは落ちる(気絶する)まで行う試合形式の練習のことである。同年5月31日には「飛行機7台飛ぶ」という記述が見られ、7人の選手がこれに取り組んでいる。

総じて日本の格闘技は対戦時間が短い。大相撲は膠着状態が4分以上続くと疲労のため「水入り」となる。柔道は国際柔道練盟では試合時間5分、剣道も5分が一般的である。「飛行機」の場合、次々と相手を替えて1時間以上も寝技を繰り返すのであるから、その凄絶さが分かるであろう。現代では無論許容し得ない練習内容ではある。

立ち技が主であった従来の講道館や武徳会の柔道に対し、初心者が多く、体格も比較的小さく非力であった四高の部員たちは、それまで専門家が手をつけようとしなかった寝技・締め技に注目して、研究と研鑽を加え、独特の寝技中心の柔道を作り上げた。それが槐となり、やがて全国に広がって「高専柔道」とよばれるようになった。

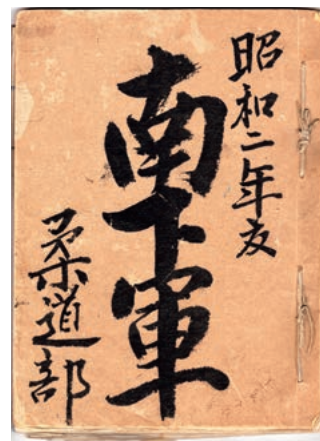
学業や成績重視の既成の学生本分論や世間的価値観から距離を置き、講道館といった既成の権威や組織にとらわれず、研究と工夫を重ね、ときに己の肉体的苦痛や死の恐怖さえも乗り越えようとした柔道部員たちは、まさに己の肉体的鍛錬を通して超然に挑んだ「求道者的自由人」であり、いわば肉体派の「超然主義」の姿をそこに見ることができる。



井上 靖

参考文献

大久保英哲「高専柔道という異端」、坂上康博(編)『海を渡った柔術と柔道』、青弓社、2010、282-286頁／同「旧制高等学校のスポーツ活動研究」：練習日誌『南下軍』からみた四高柔道部の修道院化、日本スポーツ社会学会、16、2008、50-70頁／同「第四高等学校のスポーツ活動研究(1)：大正3年柔道部『練習日誌』から」、金沢大学教育学部紀要、教育科学編 56、2007、29-36頁／同「旧制第四高等学校のスポーツ活動研究(2)：昭和2～3年(井上靖在籍当時)の柔道部練習日誌から」、金沢大学教育学部紀要、教育科学編 56、2007、37-49頁



柔道部練習日誌『南下軍』

四高手ぬぐいコレクション



第四十三回時習寮記念祭(一九三五年)



四高無声堂 明治村



第七回日本歌歌祭(一九六七年)



第四十四回時習寮記念祭(一九三六年)



四高開学百年記念(一九九六年)



四高北辰会第三十九回水上大会(一九三五年)



超然寮 一九三四年



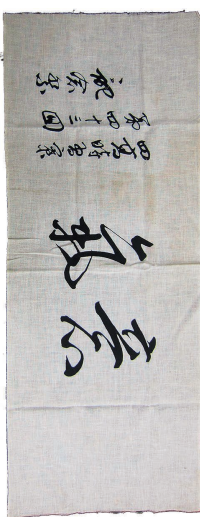
北辰会秋季陸上運動会(一九三四年)



第四十二回時習寮記念祭(一九三四年)



四高一水会二〇〇回記念(一九九五年)



第四十三回時習寮記念祭(一九三五年)



創立八十五周年記念(一九七一年)



時習寮第四十二周年記念(一九三四年)



北辰居其所而眾星共之 井上靖



四高陸上運動会(一九三六年)

四高同窓会の歴史と現在

堀井 美里(合同会社 A M A N E)

大正15(1926)年5月、母校との連携強化と卒業生相互の親睦を目的として、第四高等学校同窓会が設立された。当時、第四高等学校(以下、四高)は、明治20(1887)年の創立以来、5,000名以上の卒業生を輩出していたが、一部の履修学科や専門学科、部活動、地方ごとの会合はあっても、卒業生全てを総括する同窓会は存在しなかった。『四高八十年』では、同窓会がなかなか誕生しなかった理由として、四高が全寮制ではないため先輩・後輩間の連携の気風が乏しかったのではないかと推測している。しかし、全寮制であった第一高等学校の同窓会が大正14年に、第五高等学校同窓会が昭和5(1930)年に発足していることから、大正末～昭和初期にかけて全国的に旧制高校で同窓会が設立される気運があり、四高同窓会の設立もその流れのひとつとして考えたほうが自然であろう。

さて、同窓会発足までの経緯を前書『四高八十年』から追ってみると、設立運動は、大正12年に理科会の生徒委員たちが、校内的な理科会を先輩との結合機関として同窓会的なものにしたいと、会員名簿を作成し、会誌を発行したことに端を発する。同14年には文科会でも同様の動きが起こり、同窓会発足が、在校生の強い意志と積極的な活動が始まりであったことがわかる。その後、卒業生たちの動きも本格化し、同年6月には東京在住四高出身者達により設立建議案が可決され、会則案とともに武藤校長へ提出されるなど、各地の四高出身者からも同窓会設立の要望が寄せられるようになった。その機が熟したのを受け、第8代校長武藤虎太は、市村塘教授を同窓会創立委員長に、四高出身の教授等を準備委員に任命する。準備委員は、趣意書と会則を起草し、発起人を選定、依頼。一方で同窓会名簿の作成と卒業生への入会案内が実施された。発足の発端となった理科会・文科会の生徒たちも、これらの事務を補助した。

同窓会ではどのような活動を行っていたのだろうか。会則第四条では、同窓会で実施する事業として、①会員名簿および会報の発行、②その他適切な事業、を挙げている。会報は、同窓会発足と同年の11月に創刊され、年2回発行された。金沢大学資料館所蔵の「同窓会報」第9号(市村塘編・発行、第四高等学校同窓会発行、1930)を見ると、卒業生による時事評論等の寄稿文、教職員の異動等を知らせる母校近況、同窓会本部による会費納入状況等の報告、各地同窓会報告、北辰会の各部による近況報告、校内各記事の他、ドイツ留学中の古谷健太郎教授等による海外通信や、第5代校長北條時敬先生頌徳碑建立除幕式など同窓会を中心に実施された事業を紹介する記事が掲載されている。こうした内容からは、同窓会の活動において、設立目的である卒業生と母校との連携が強く意識されている様子が窺える。

会報第9号では、活動報告をしている各地同窓会として、東京支部、東京淡如会、東京土星会、東京四高敷物天震会、在東京四高一会、岐阜四高会、九大四高会、旧友会、十四会、台北四高会、満州四高会が挙げられている。このような同窓会の種類について、野口務氏(昭和3年文甲卒)は、①学年別同窓会、②各地域別同窓会、③北辰会所属の各部の会、④各種同窓会(職域、レジャー、その他)の四系統に分けられるとまとめている(参考文献参照)。今回確認できた会報9～11、14～17号(1930・1931、1933・1934)には、68の各種同窓会が掲載されているが、この四系統以外に、九大四高会や大阪帝大四高会、京都帝大医学部四高金京会、東北帝大数学四高会など、卒業生の進学先の大学で結成された同窓会が多く見られるのが特徴的である。こうした同窓会では、例会や大会、新入生の歓迎会、メンバーの祝時の祝賀会など同窓生の交流を深める親睦会が随時開催されていた。

戦後の同窓会は、昭和23(1948)年に再建され、開学70、80、85、88、90、95、100、105、110、115、120、125年の節目の年に記念祭を開催し、昭和62(1987)年には会則を決定して組織化を進めた。また、会員12,000余名の親睦や交流を目的として、翌年から会報『北辰』を発行するなど、精力的な活動を行っていた。

平成24(2012)年6月、四高同窓会本部の活動が同年度をもって停止することが決定し、翌年には、同窓会報『北辰』が第75号で刊行を終えることとなった。最終号には、東京・北の都会と関西四高会の各地同窓会、学年ごと、部活ごとの同窓会の活動記録の他、全国の寮歌祭への参加記、同窓生の現況等が掲載されている。一高同窓会も平成25年度末に、静岡高同窓会も同24年度末に活動停止、解散となるなど、旧制高校同窓会の活動が時間の経過とともに縮小していくのはやむを得ないことである。しかし、会報最終号でも語られるように、各同窓会活動への金沢大学卒業生の参加や、四高水泳部尾水会から金沢大学水泳部への資料や資金の寄付、同窓会所蔵四高資料の金沢大学資料館への譲渡など、四高同窓会の活動や歴史は、後身校である金沢大学へ確実に引き継がれている。

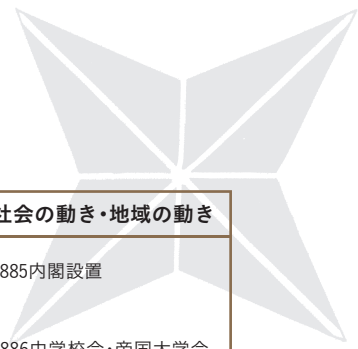
主な参考文献

四高開学八十年記念出版委員会編『四高八十年』(第四高等学校同窓会、1966)

野口務「四高同窓会活動 北辰の輝くかぎり」(四高開学百年祭広報委員会編『第四高等学校開学百年全国大会記念誌 四高百年一吾永久に緑なる』第四高等学校開学百年祭実行委員会、1986)

作道好男・江藤武人編『北の都に秋たけて』(財界評論社、1972)

四 高 年 表



西暦	年号	四高のできごと	校長	社会の動き・地域の動き
1886	明治19	政府、第4区(新潟・富山・石川・福井)の高等中学校を金沢に設置することを決定(11月30日)。		1885内閣設置
1887	明治20	第四高等中学校設立(4月18日)。医学部設置(8月19日)。開校式(10月26日。入学者89名)。	初代: 柏田盛文 (1887.9-1891.10)	1886中学校令・帝国大学令公布
1889	明治22	第1回卒業証書授与式(7月15日。木村栄ほか3名)。	2代: 中川元 (1891.10-1893.8)	1889大日本国憲法公布。金沢市制施行。
1892	明治25	新校舎に移転(4月1日)。金色四稜星の帽章制定(9月)。		1890教育勅語発布。第1回帝国議会。
1893	明治26	時習寮開寮(10月1日)。新校舎落成式(10月30日)。	3代: 大島誠治 (1893.8-1897.2)	1894高等学校令公布。日清戦争(-95)。
1894	明治27	高等学校令により第四高等学校と改称(9月11日)。		1898金沢駅開業。金沢城内に第9師団司令部設置。
1895	明治28	四高「北辰会」結成(2月28日)。	4代: 川上彦次 (1897.2-1898.1)	1902高山樗牛没(1871~)
1900	明治33	三々塾設置(11月3日。公認下宿の始まり)。	5代: 北條時敬 (1898.1-1902.5)	1904日露戦争(-05)
1901	明治34	医学部が分離独立し、金沢医学専門学校となる(4月1日)。	6代: 吉村寅太郎 (1902.5-1911.8)	1910大逆事件。韓国併合。夏目漱石『門』を発表。
1906	明治39	時習寮南寮、火事で全焼(3月19日。いわゆる「超然火事」)。		1913北陸線全線開通
1907	明治40	第2回南下軍遠征(3月30日)。この時「南下軍の歌」制作。	7代: 溝淵進馬 (1911.8-1921.11)	1914第一次世界大戦(-18)
1908	明治41	寒潮事件(4月)。「超然趣意書」が書かれる(7月)。		1917ロシア革命
1909	明治42	校旗制定(9月23日)。		1918シベリア出兵。米騒動。高等学校令・大学令公布。
1911	明治44	四高事件(5月。鉄拳制裁問題に端を発した校長排斥運動)。	8代: 武藤虎太 (1921.11-1931.1)	1919高等学校規程制定
1914	大正3	第1回全国高専柔道大会優勝(12月31日。これより7連覇)。		1923関東大震災
1915	大正4	寮歌「北の都に秋たけて」制定(10月)。		1925治安維持法・普通選挙法公布。中学校以上で軍事教練開始。
1917	大正6	武道道場(無声堂)落成式(10月26日)		1929世界恐慌
1919	大正8	制帽の白線が4本から2本となる(9月10日)。		1931満州事変
1921	大正10	学年暦を変更し、始業日が9月11日から4月1日となる。	9代: 小松倍一 (1931.1-1937.8)	1937日中戦争開始
1926	大正15	四高同窓会設立(5月)。		1938国家総動員法成立
1928	昭和3	時習寮全寮自治制許可(2月)。四高同盟休校事件(6月)。	10代: 菰田萬一郎 (1937.8-1939.3)	1939第二次世界大戦(-45)
1930	昭和5	指導教官制度を設ける(3月17日)。		1941アジア太平洋戦争開戦
1933	昭和8	腸チフス禍事件(6月。寮生8名死亡)。	11代: 岡上梁 (1939.4-1943.9)	1943学生生徒の徴兵猶予停止
1934	昭和9	北辰会プール完成。	12代: 石井忠純 (1943.9-1946.3)	1945ポツダム宣言受諾。GHQによる占領政策開始。
1937	昭和12	創立50周年記念式(10月14日)。		1947日本国憲法施行
1940	昭和15	北辰会を北辰報国団に改組(11月3日)。	13代: 鳥山喜一 (1946.3-1949.7)	1949国立大学設置法公布
1941	昭和16	漕艇班琵琶湖遭難事件(4月6日。部員・OB合計11名死亡)。		1950朝鮮戦争(-53)
1943	昭和18	四高校庭にて四高等4校の出陣学徒壮行会(11月13日)。	14代: 伊藤武雄 (1949.7-1950.3)	1951サンフランシスコ講和条約・日米安保条約調印
1944	昭和19	粟ヶ崎血盟事件(4月)。		
1945	昭和20	授業停止(4月)。学校再開(9月)。寮記念祭復活(10月22日)。自治復活祭(12月8日)。		
1949	昭和24	新制金沢大学の設置により同大学に包摂され、「金沢大学第四高等学校」と改称(5月31日)。		
1950	昭和25	四高最後の卒業式(3月25日。第63回)。閉校。		
2012	平成24	四高同窓会本部の活動停止を決定(6月)。		
2013	平成25	四高同窓会報『北辰』75号刊行をもって同窓会活動停止。		

出品資料目録

I. 四高の伝統			
1	四高制服一式		本館
2	明倫堂扁額	1792	本館
3	塚原嘉藤編『中川元先生記念録』	1916	本学中央図書館
4	溝淵進馬著『教育学講義』	1909	本学中央図書館
5	菰田萬一郎著『思想と自己創造』	1929	本学中央図書館
6	エルンスト・ヘッケル著；岡上梁、高橋正熊訳；加藤弘之関『宇宙の謎』	1906.	本学中央図書館
7	鳥山喜一著『黄河の水：支那小史』	1949	本学中央図書館
8	伊藤武雄著『百日紅』	1969	四高同窓会(本館)
9	ゲエリング作・伊藤武雄訳『海戦』	1924	本学中央図書館
10	ガルバノメーター	1884頃	本館
11	指針検流計	1911	本館
12	指針検流計	1924	本館
II. 「超然」の時代			
13	日本海大海戦実写		本館
14	海軍採用徴募令状	1901	本館
15	叙勲通知	1906	本館
16	宣戦詔書	1905	本館
17	『少年世界』第1巻(復刻版)	1895	本学中央図書館
18	文部省著『小學地理附圖：尋常小學校用』	1908	本学中央図書館
19	樋口勘治郎、曾根松太郎合著『國定教科書標準據修身教授書』	1904	本学中央図書館
20	国語調査委員会編纂『口語體書簡文に関する調査報告』	1911	本学中央図書館
21	国語調査委員会編纂『漢字要覧. 訂正版』	1908	本学中央図書館
22	第九師団軍旗縮図	1907	金沢市立玉川図書館 近世史料館
23	リアリスティック・スコープ	1914	本館
24	リアリスティック・スコープ用の立体写真(日露戦争の写真)6枚	1914	本館
25	兼六公園八景	1903	金沢市立玉川図書館 近世史料館
26	訂正実測金沢市明細図	1903	金沢市立玉川図書館 近世史料館
27	金沢駅発車時間表	1931	金沢市立玉川図書館 近世史料館
28	北陸本線及七尾線加越線氷見線新湊線中越線主要駅発車時刻表	1929	金沢市立玉川図書館 近世史料館
29	「至誠」扁額	1901	本館
30	樗牛全集	1904-06	本学中央図書館
31	高山林次郎著『世界文明史』	1898	本学中央図書館
32	『太陽』第6巻第8号「特集：十九世紀」	1900	本学中央図書館
33	『帝国文学』第1巻	1895	本学中央図書館

III. 超然主義の誕生			
34	西田幾多郎編『廓堂片影』	1931	本学中央図書館
35	北條文庫『前田家由来』		本学中央図書館
36	北條時敬ノート 4冊	1889	金沢市立玉川図書館 近世史料館
37	『北辰会雑誌』 31～40号	1902-1905	本学中央図書館
38	超然扁額	1908	四高同窓会 (石川四高記念文化交流館)
39	超然趣意書	1906	四高同窓会 (石川四高記念文化交流館)
40	「超然」の扇((岡上梁書)	1942	四高同窓会 (石川四高記念文化交流館)
41	第四高等学校火災復旧寄宿舎全面ノ図		石川県立 歴史博物館
42	「超然」旗		四高同窓会(本館)
IV. 超然主義と四高の学生生活			
43	「南下軍」旗		四高同窓会(本館)
44	『南下軍』(柔道部日誌)		本館
45	四高柔道着		本館
46	時習寮看板		四高同窓会 (石川四高記念文化交流館)
47	『時習寮寮務日誌』		本学中央図書館
48	『第四高等学校時習寮寮生心得並寮生規約』	1940	本学中央図書館
49	時習寮文化部『時習寮報』37号	1941	本学中央図書館
50	時習寮図書部『超然』34号	1929	本学中央図書館
51	生徒心得	1942	本学中央図書館
52	昭和9年度記念祭写真帖 四高時習寮	1934	本学中央図書館
53	超然寮記念祭系はがき	1926頃	四高同窓会(本館)
54	四高理科會記念繪葉書	1926	四高同窓会(本館)
55	時習寮五十回記念祭繪葉書	1942	四高同窓会(本館)
56	四高プール設計図		本館
57	北辰報国団『北辰』追悼号	1942	本学中央図書館
58	四高旅行部行友会 『ヘルクハイル』第2号	1925	本学中央図書館
59	北辰報国団蹴球班『極星』第8号	1941	本学中央図書館
60	四高排球班『南下』第7号	1940?	本学中央図書館
61	四高北辰会水泳部『飛沫』第9号	1940	本学中央図書館
62	第四高等学校手ぬぐいコレクション		本館等
63	『第四高等学校同窓会報』 26～31号合冊	1939-1943	本学中央図書館
64	『超然—四高昭和24修文集』	2003	四高同窓会(本館)
上記以外にも、四高同窓会関係の諸資料や、金沢大学の運動部等と四高とのつながりを示す資料、OBのインタビュービデオなどを展示しています。			

☒ 協力者・協力機関 (アイウエオ順)

石川県立歴史博物館／石川四高記念文化交流館／
金沢市立玉川図書館近世史料館／
金沢大学附属図書館中央図書館／能川泰治

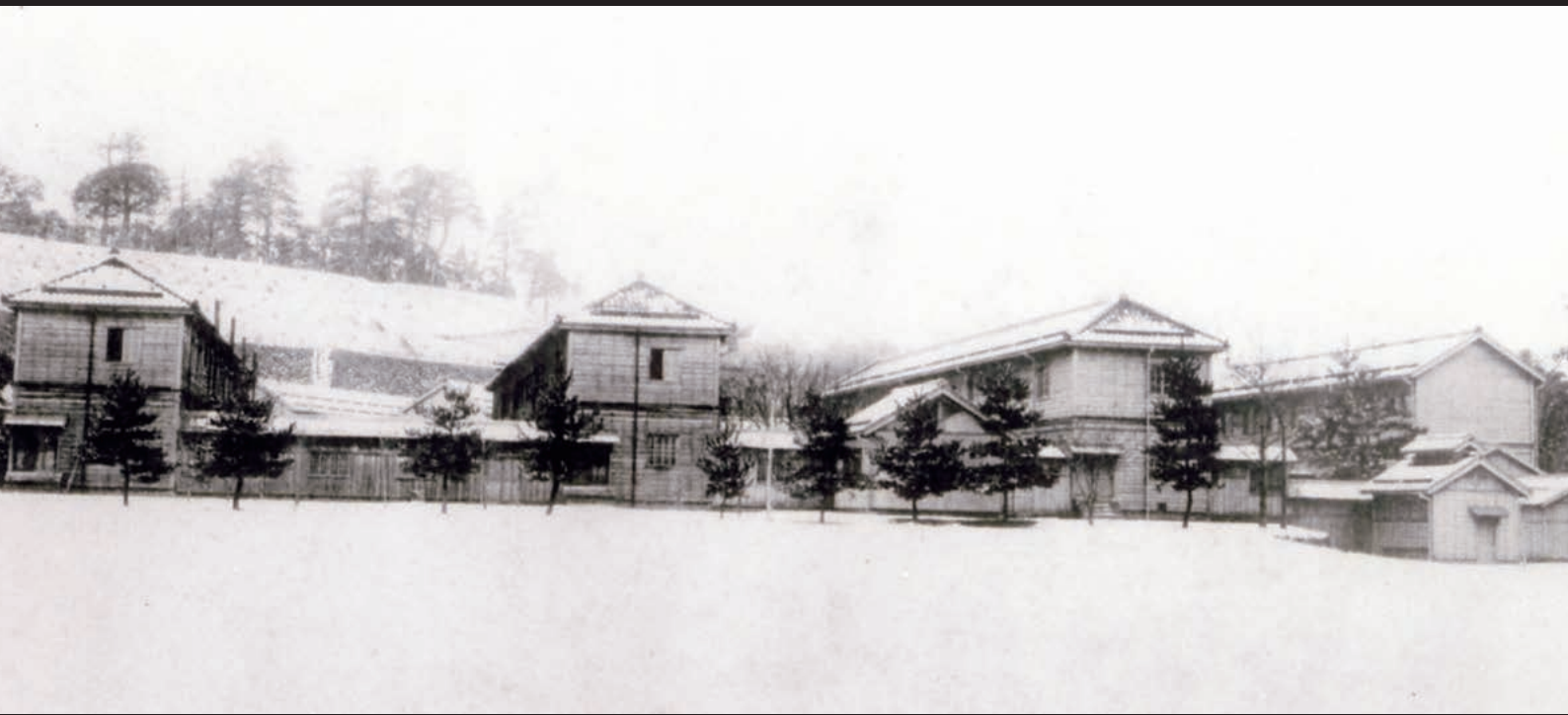
表紙写真:「玄関の屋根に並んで…」
(大正後期～昭和前期、四高同窓会蔵)
*写真は加工しています。
裏表紙写真:「雪の時習寮全景」(明治42年、四高同窓会蔵)
表紙デザイン:笠原健司(金沢大学資料館)

☒ 執筆者 (掲載順)

奥野正幸(金沢大学資料館長)(ごあいさつ)
古畑 徹(金沢大学附属図書館長)(本文)
本康宏史(金沢星稜大学教授)(7頁)
杉山欣也(金沢大学教授)(8頁)
井上好人(金沢星稜大学教授)(9・10頁)
大久保英哲(金沢大学教授)(12頁)
笠原健司(金沢大学資料館非常勤職員)(13頁)
堀井美里(合同会社AMANE)(14頁)

☒ 主要参考文献 (ホームページを含む)

- ・金沢大学50年史編纂委員会編『金沢大学五十年史・通史編』(金沢大学50周年事業後援会、2001)
- ・旧制高等学校資料保存会編『資料集成 旧制高等学校全書』第4巻・校風編(昭和出版、1981)
- ・四高開学八十年記念出版委員会編『四高八十年』(第四高等学校同窓会、1966)
- ・「時の曠野—第四高等学校時習寮」編纂委員会編『時の曠野:第四高等学校時習寮 1893～1950』(北國新聞社、2004)
- ・寛田知義『旧制高等学校教育の成立』(ミネルヴァ書房、1975)
- ・作道好男・江藤武人編『北の都に秋たけて』(財界評論社、1972)
- ・高橋左門『旧制高等学校の教育と学生』(国書刊行会、1992)
- ・長志津絵・高木博志責任編集『週刊 新発見!日本の歴史 39・近代4 「国民」を生んだ帝国の文化』(朝日新聞社、2014)
- ・井上好人「四高「超然主義」の神話誕生—河合良成の校風改革運動と時習寮の「38名」」(『金沢大学資料館紀要』7、2012)
- ・井上好人「四高「寒潮事件」に秘められた四高生と女学生との純愛—なぜ“墮落学生”のレットルが貼られたのか—」(『金沢大学資料館紀要』8、2013)
- ・小林竜一「第一高等学校校長としての新渡戸稲造—「籠城主義」との対決—」(『社会学論集』17、2011)
- ・手戸聖伸「旧制第一高等学校における教養と宗教—明治後期から大正期を中心に—」(『宗教学年報』17、2000)
- ・野口務「四高同窓会活動 北辰の輝かざり」
(『第四高等学校開学百年全国大会記念誌 四高百年—吾永久に緑なる』
四高開学百年祭広報委員会編、第四高等学校開学百年祭実行委員会発行、1986)
- ・金沢大学Virtual Museum Project HP



平成26年度金沢大学資料館特別展

超然 ～第四高等学校の校風と学生たち～

開催期間：平成26年10月15日（水）～11月28日（金）

編集・発行：金沢大学資料館

発行日：平成26年10月15日

印刷：能登印刷株式会社